事業完了報告書

調査研究期間等

調査研究期間	委託を受けた日　～　令和８年３月６日
調査研究事項	以下のⅠ～Ⅴのいずれであるかを記載した上で、研究テーマを明記する。 Ⅰ．教育課程、教育環境整備に関すること Ⅱ．広報・相談体制の充実に関すること Ⅲ．都道府県・市町村間の連携に関すること Ⅳ　その他夜間中学における教育活動充実に関すること
調査研究のねらい	研究テーマ：学びの多様化学校を併設する夜間中学校としての 効果的な取組についての研究 これまで本校は、学びの多様化学校を併設する夜間中学校として、昼間部・夜間部（以下、昼夜間部とする）それぞれの特徴を生かしながら、「世代や国籍を超えてふれあい学び合う」という学校コンセプトに基づき、「夢やよろこびを大切にする生徒を育てる」という学校教育目標の実現に向けて学校づくりを進めてきた。その中で、昼夜間部の交流を通して、期待していた以上の成果が得られるようになってきている。それは夜間部生徒の学びに向かう姿が昼間部生徒に良い影響を与えるというものである。夜間部生徒はこれまでできなかった「学ぶこと・できること・わかること」を心から喜び、楽しみながら学校生活を送っており、純粋に楽しそうに、懸命に取り組んでいる。その姿は、昼間部生徒にとって励みとなり、登校することへの気持ちの重荷を軽くするものとなっている。夜間部生徒にとっても学齢期の昼間部生徒と学ぶことで、中学生としての実感、学びを取り戻す喜びを一層大きくしている。 ただ近年は、かつて夜間部において多くを占めていた、戦中・戦後の混乱期の未就学者が高齢のため入学希望が少なくなる一方で、新渡日生徒や不登校等を理由に実質的に義務教育を十分受けることができなかった形式卒業者の入学希望が増えてきたことにより、生徒層の変化が生じている。 これまでは、昼夜間部が共に学び、活動する場を設定すれば自然に好循環が生まれていたが、生徒層の変化により、学びの経験や背景、国籍が多様な生徒に対して、いかに関係性の構築やコミュニケーション力の向上を促し、彼らの学力を保障するかという新たな課題が生じてきている。そのため、これまでの成果を踏まえながら、新たな課題に対応するための教育のあり方を検討していく必要がある。 このような理由で今回のテーマを設定し、以下の取組を通じて研究を進

めることとした。

○　夜間中学校と学びの多様化学校を併設する洛友中学校は、実技教科において昼夜間部生徒が共通の課題に向かい、体験的な活動に取り組む時間を「交流の時間」として週２～３回時間割に組み込んでいる。こうした合同学習のあり方について、現在の課題である学力保障への貢献を含む教育的効果を高めることを目的とした研究と実践を行う。

○　取組の教育的効果を測るため、「交流の時間」について、年度末に生徒に対するアンケートを実施する。

ここ数年来、多く来校される自治体、教育機関等の視察の中で、今後学びの多様化学校と夜間中学校を併設する学校を開校するための参考にしたいという依頼が増加している。上記の研究と実践は、夜間中学校を開校するという都道府県、政令指定都市等の課題と、増加する不登校問題解決のためのひとつのモデル校としての期待にこたえるものでもある。

調査研究の成果

本校には、図１・２のとおり、昼間部５・６限、夜間部１・２限（１７：００～１８：１５）に、昼夜間部の生徒がともに学ぶ合同授業や「交流の時間」がある。授業は学年別の少人数制で行われ、月・水・金は「交流の時間」（カリキュラム上は総合学習）、火・木は合同授業として実技教科を合同で学び、世代や国籍を超えた交流を図っている。「交流の時間」の内容によっては６限まで行い、７５分授業となる場合もある。

（図１）

校時		1校時（30分）	2校時（45分）				（30分）	3校時（45分）				4校時（45分）				～20:40（15分）
月	課外 日／国	交流・総合	国語	理科	国語	社会	給食	国語	国語	理科	国語	数学	数学	英語		学活・課外
火	課外 英	音／技家					給食	国語	国語	社会	国語	国語	社会	国語	理科	学活・課外
水	課外 日／数	交流・総合	英語	英語	数学		給食	国語	国語	理科	国語	国語	理科	国語	社会	学活・課外
木	課外 理	美／保体					給食	国語	社会	国語	理科	国語	国語	社会	国語	学活・課外
金	課外 社	交流・総合	数学	数学	英語		給食	総合				英語	英語	数学		学活・課外

（図２）

登校（昼間部　13:15ごろ　　夜間部　16:50ごろ）

昼間部	学　活	13:30～13:40	(10分)
	1校時	13:40～14:30	(50分)
	2校時	14:40～15:30	(50分)
	3校時	15:40～16:30	(50分)
	4校時	16:35～16:55	(20分)
	5校時	17:00～17:30	(30分)
	6校時	17:30～18:15	(45分)
	給　食	18:15～18:50	(35分)
夜間部	7校時	18:50～19:35	(45分)
	8校時	19:40～20:25	(45分)
	学活	20:25～20:30	(5分)

重なりの時間

1　本調査研究では、以下の活動を実施した。

（１）昼夜間部合同授業について

〇音楽：「チャイムトーン」演奏

昼夜間部合同で練習を重ね、文化祭・懇親会において合同演奏を実施した。世代や国籍を超えて音を合わせる活動を通して、自然な交流が生まれた。

〇美術：ランプシェード・作品展示・絵本づくり等

昼夜間部でデザインや表現意図を相談しながら制作を進めた。校内展示や文化祭発表を通じて、互いの感性や価値観を理解し合う機会となった。

〇保健体育：球技大会に向けた種目練習

ペットボトルボーリング、カーリングゲートボール※１、「チーム対抗競技※２」などの種目練習を通して、年齢差・体力差を越えて協力し合う姿が見られた。昼間部生徒が高齢の生徒を支援するなど、自然な助け合いが生まれた。

※１グランドゴルフの道具を利用し、スティックでボールを打ち、パターゴルフの要領で行う。

※２ボッチャやモルックなど、体力差を問わず誰もが楽しめる競技を昼夜間部対抗、合同グループ対抗など、チームを分けて合同で行

	った。 〇技術・家庭：味噌づくりによる日本文化学習 外国籍生徒にとって「日本の伝統食文化」を体験的に学ぶ機会となった。仕込み→調理→活用まで一連の流れを昼夜間部合同で実施し、調理実習では持ち寄った味噌で味噌汁を作った。 （２）「交流の時間」における主な教育活動について 〇絵本づくり（交流学習） 絵本作家の指導を得て、グループごとにテーマを決め、ストーリーの構成や図案、オリジナルキャラクターのデザインなど、メンバー同士で何度も話し合いを重ねながら、数か月かけてグループで１冊の絵本を制作した。得意分野を生かして役割分担し、相談しながら完成させた。地域施設で展示し、学校の広報にもつながった。 （３）全国大会・視察・校外研修について 〇全国夜間中学校理事会 義務教育の保障、経済的支援、多文化教育等の全国的課題を共有し、本校の実践を全国動向と照らし合わせて改善点を把握した。 〇夜間中学校研究大会（第71回） 夜間中学の原点や多文化教育、人権教育等を扱う分科会で研修・交流を深めた。生徒体験発表から、学び直しの意義や背景を理解する実践的示唆を得た。 〇宿泊校外学習（修学旅行） 昼夜間部の全生徒を対象に実施し、１泊２日で寝食を共にすることで相互理解をさらに深める機会となった。 上記の活動を通じて、本校の特色である「多世代・多文化が学び合う」環境を生かし、昼夜間部合同授業や「交流の時間」の活動を通して相互理解・協力の姿勢が日常的に育った。 また、昼間部（学びの多様化学校）と夜間部（学齢超過者・学び直しのための夜間中学）の相乗効果により、互いを思いやりながら活動に取り組む姿が見られ、本校の学びのコンセプトを具現化できた。 今後も学校教育目標の実現に向け、昼夜間部合同授業や「交流の時間」を軸に教育実践を継続・発展させたい。 ２　本調査研究では、「交流の時間」について、年度末に生徒に対するアンケートを実施した。 （１）アンケートのねらい 昼夜間部の交流において、どんな活動をしたいと思っているか、ま

た、その活動が学ぶ意欲の向上にどれほど貢献するのかを把握する。

（２）アンケートの内容と方法

昼夜間部の交流において、どんな活動が印象に残っているか選んでもらい、その活動を通して、自分がどのように変容したかを記述してもらう。

対象：昼夜間部の生徒２２人（アンケート時に欠席した者は未実施）

（３）アンケート結果と分析

質問：「楽しかった」「おもしろかった」「もう一度やってみたい」など、心の残った活動を3つ選択

活動内容	人数	割合
苗　球根(ガーデニング)年末寄せ植え体験	5	8%
漢字学習	5	8%
陶芸	11	17%
グループで話し合った人権学習	3	5%
合同作品　ランプづくり	5	8%
チームで作る手作り絵本	13	20%
動物お絵かきさんのお話	5	8%
クリスマスリース　懇親会の装飾	15	23%
ダンス	4	6%

①アンケートから分かる「交流の時間」における教育的効果

〇生徒の体験的な学びを通した自己効力感の向上

アンケート結果では、陶芸（１１人、１７％)、手作り絵本（１３人、２０％)、クリスマスリースづくり（１５人、２３％)、ガーデニング（５人、８％）など、体験的な活動が多く選ばれ、生徒が達成感や自己効力感を高めたことが示された。

〇昼夜間部の相互理解による視野の広がり

生徒からは「他の人の意見を聞く大切さが分かった」「多様な価値観や背景への気づきを得た」など、相互理解の深まりを示す意見が多く見られた。

〇関係性の構築とコミュニケーション力の向上

協働的な活動を通して、「人と話せるようになった」「チームワークの大切さを知った」などの記述が１２件あり、目標やプロセス

	を共有することによって相手の立場に立つことができ、信頼関係の構築につながった。 〇学力保障の観点からの成果 漢字学習を選んだ生徒が５人（８％）おり、「交流の時間」が基礎学力の定着や学習意欲の向上にも寄与したことがうかがえる。 ②交流活動の構造的な成果 〇個性に応じて協働できる環境づくりの有効性 生徒は年齢や国籍等、自分とは異なる背景を持つ方との交流の中で自分の役割を担い、「得意を発揮できた」「自分の役目があった」と感じており、各自の個性に応じた環境設定の効果が確認できた。 〇継続的な活動による長期的成長 一年に渡る活動を終えて、「去年と比べて大きく成長した」「人生が変わったように感じる」など、継続的活動が自己理解や所属感の向上に寄与したことが見られた。 本調査研究では、洛友中学校の昼夜間部が共に取り組む交流活動の教育的効果を、アンケート結果をもとに検証した。その結果、体験的な活動が生徒の自己効力感を高めるほか、多様な背景をもつ生徒同士で相互理解を深めるとともにコミュニケーション能力を向上させるなど顕著な成果が認められた。また、学力保障の観点からも一定の成果が確認された。これらの成果は、学びの多様化学校を併設する夜間中学校としての教育的モデルとして他自治体の開校計画にも資するものである。